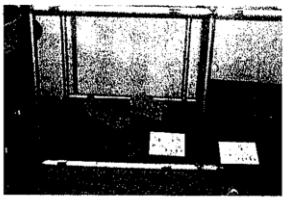
今昔物語 第45話

砥石（といし）

古代の遺跡から発見される砥石には、磨製石器の製作に用いた砥石、玉類の製作に用いた玉磨砥石、金属利器の研磨に用いた砥石などがあります。

磨製石器用の砥石には特定の形がなく、石皿の裏面を利用したものがあります。玉磨砥石のうち、細長い溝が並んだものは識別しやすいですが、摩滅面の広いものは、出土地が玉作り関係の遺跡かによって用途を判断します。弥生式時代の遺跡から発見される水成岩質の不整形の砥石は、石包丁などの刃を研ぐ場合に用いられたのでしょう。断面が長方形の棒状の砥石は弥生時代から多くなりますが、すべてが金属利器用とはいえないと思います。



古墳時代になると、短冊形で一端に紐孔（ひもあな）をあけた携帯用の提砥石がみられるようになります。朝鮮の三国時代の遺物にあるような、飾り金具で頭部を包んだものは、砥石といってもむしろ装身具化したものでしょう。

今昔物語 第46話

提瓶（ていへい）

須恵器の器形の一種です。「さげがめ」とも読めますが、考古学上の新造語です。扁球形の器体の側面に小さい口頸部をつけた形で、普通は肩に2個の半環状または鉤状（かぎじょう）の取っ手が付いています。取っ手がいぼ状の突起に変わったり、まったく取っ手のない小型品もありますが、一般に携帯用の水筒とされています。ろくろを用いて作った器体の上部を封じて側面に頸孔（けいこう）を開け、別に作った口頸部を付けています。従って器体と口頸部体の一面は比較的平らで、他の面はまるみを持っていることが多いです。大型品には、まるみのある面にもう一つ半環状の取っ手を付けたものがあります。

提瓶の特殊型式のうち、器体が環状になった環状提瓶は極めてまれにあります。また、皮袋に似た皮袋形土器（皮袋形提瓶）はやや多いようです。

須恵器としては、ほとんど古墳時代に限られた器形で、朝鮮半島でもまれにしかありません。しかし、よく似た土器はヨーロッパ各地にあります。